

ひょうたん島通信

大槌発! 第34回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



遅しきプランクトン

西部裕一郎 大気海洋研究所
国際沿岸海洋研究センター沿岸生態分野 特任准教授

センター前に漂着した大量の木とヨシ。2016年8月31日筆者撮影。

8月に発生した台風10号は、日本の南海上で迷走した後、気象庁が統計を開始して以降初めて東北太平洋側に上陸した台風として記憶に新しい。この台風は岩手県や北海道など北日本に大きな被害をもたらし、国際沿岸海洋研究センターがある大槌町でも多くの住民が避難を余儀なくされ、大雨による住宅の浸水や道路の冠水などが生じた。当日（8月30日）は夕方に岩手県沿岸部への上陸が予想されていたため、センターの教職員と学生は早めの帰途につき、私は宿舎前の河川（釜石市の長内川）が氾濫しないか不安を抱えつつ一夜を過ごした。翌朝は台風一過の晴天に。幸いにもセンターまでの道路は大きな冠水も無く、無事に到着することが出来た。そして、建物外の階段を上りつつ何気なくセンター前の海を見て我が眼を疑った。そこには河川から大槌湾へ流れ込み、南風によってひょうたん島に繋がる突堤付近へと吹き寄せられた大量の木やヨシがまるで陸地のように広がっていたのだ。中には一抱えもあるような木が根ごと流されており、また海は一面泥水のように濁っていたことから、

いかに大量の河川水が凄まじい勢いで湾内へ流れ込んだかが伺い知れた。

これほどの大水の後では、プランクトンは沖へ流されていなくなってしまうのではないかと。そうした疑問を持ちつつ、台風から約1週間後

の9月7日に大槌湾の湾奥部へとサンプリングに向かった。私が研究しているアカルチアという動物プランクトンは、湾の奥部のような閉鎖的な環境を好む種類である。大槌湾の湾奥部には鵜住居川うのすまいがわが流入しており、生産性が高い反面、大水のような急激な環境変化の影響を強く受ける場所でもある。プランクトンネットを曳き、サンプルを覗いてみると、はたして彼らはいつもとじょうにそこにいたのである。これには驚いたと同時に、やはりという思いもあった。なぜなら2011年3月のあの津波の時も2ヶ月後



の調査の際には湾奥部にかなりの密度の個体群が戻っていたからだ。その回復のメカニズムははっきりとは分からないが、少なくともアカルチアは大水や津波といった攪乱を毎年数回から数十年に一度の頻度で経験し、それを乗り越えて世代を繋いできたのだ。シャーレの中を泳ぎ回る1ミリにも満たない小さなプランクトンに、厳しい海を生き抜く逞しい姿を見た気がした。



大槌湾で多く出現する動物プランクトンのアカルチア。

調査船「弥生のつばやき」 大槌学園「ふるさと科」授業



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

去る9月1日（木）、台風10号一過の晴天の下、義務教育学校（小中一貫校）大槌学園7年の生徒さん（33名）が、「ふるさと科」授業の一環として、今回初めて、国際沿岸海洋研究センターを訪れました。「ふるさと科」は、大槌町独自の復興人材育成科目として、文部科学大臣より「教育課程特例校」の指定を受け開設されているものです。

参加された生徒さんは、ウニ・アワビ等地元産の海産物について、地元で生息する生物についてと遠隔操縦水中ロボット

(ROV) の操縦体験、三陸に回遊するウミガメについて、三つのテーマを座学・実習併せて学びました。

座学を受けた生徒さんからは活発に質問が飛び、生きたウニ・アワビに初めて触れる生徒さんからは悲鳴が、ウミガメの餌付けに成功した生徒さん、ROVの操縦が成功した生徒さんの周りからは歓声が上がっていました。

7月の特別・一般公開の時と同じく、自分は今回も遠目から見守るのみです……。



学年は変わっても（7月の特別公開には大槌学園4年児童の皆さんが訪れました（前回つばやき））やっぱりウミガメは人気です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）